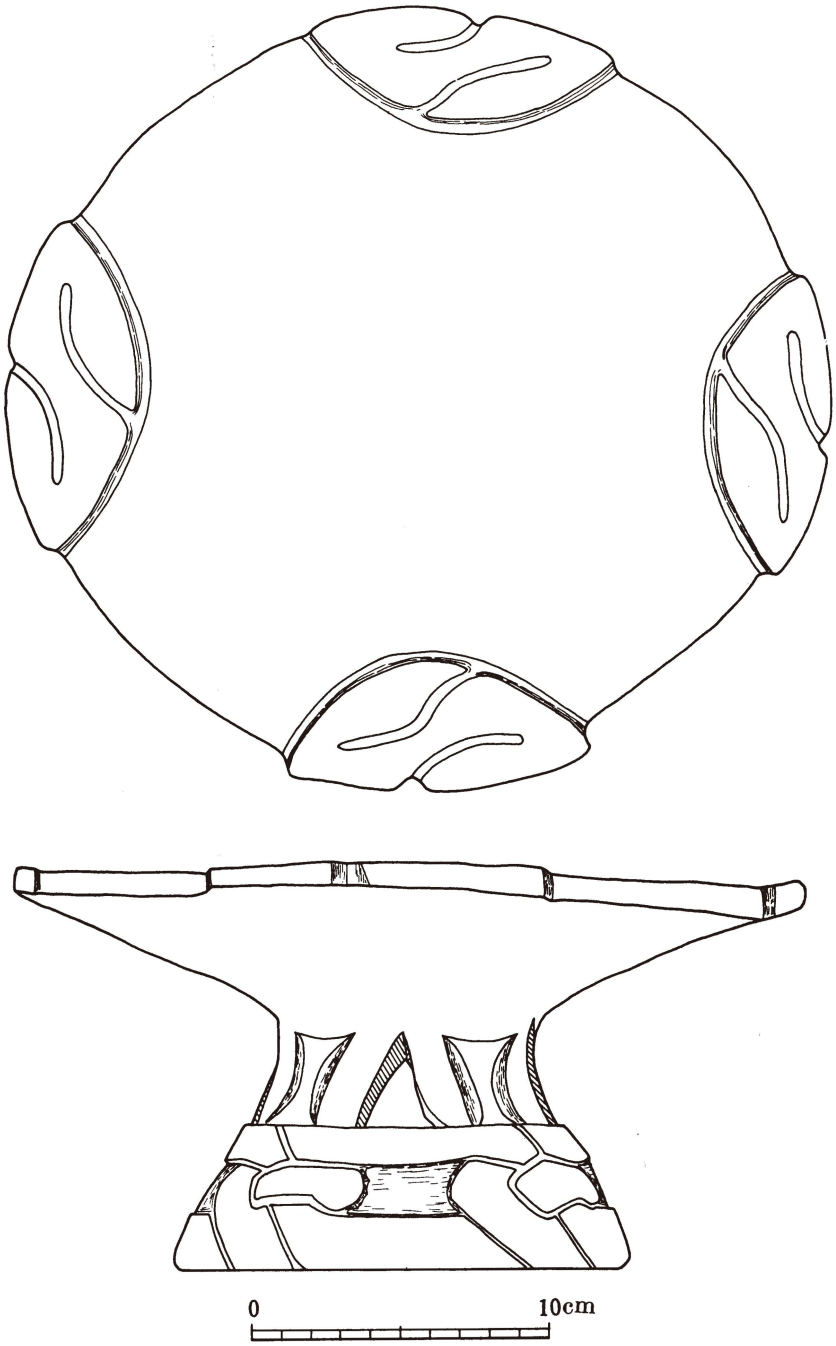
器台付皿形土器

遺　跡

表題の土器が発見されたのは，鹿児島県日置郡吹上町下中ノ里白寿の畑地である。昭和50年12月，吹上町在住の辻正徳氏外によって調査された。遺跡地は伊作川下流の沖積平野にのぞむシラス台地上で，入来遺跡より水田をへだて，東北東300mの距離にある。

標高20m余の台地上面で四方をみわたせる眺望のきく場所である。

遺跡地には長さ180cm，幅110cm，厚さ30cmの扇形の大石があり，大石を除去したところ直下には遺構は発見されず，石に接する形で，表層（30～40cmの厚さ）の褐色土を除去した下に，



第1図　白寿遺跡出土台付皿形土器実測図

基盤のシラス層に径１ｍ，深さ８０～９０cmの掘り込みが発見され，この土壙から縄文後期の土器片と共に表題の土器並びに碧玉製管玉が発見された。

管玉は長さ３５mm，径１３mm，孔の径４mmで，しずんだ青色で光沢がありよく磨かれている。

皿の径は推定２７cm，高さ１３cm，底部の径１５cmである。

やや楕円形気味の皿の部分は，四個のわずかに張り出した葉状の肥厚部があり，縁の中程に刻目を施し，葉の上面には２本の沈曲線を彫りこんで飾りとしている。器台は中空で，上半部には４個の三角形の透かしがあり，透かしの間にはx字状の篦削り文様が施されている。下半部の文様は，一端が蕨手状を呈する４本の帯が，籠編み状に互に潜りあって文様を形成し，帯と帯の間をx字を両側にひろげた形の篦削り文様を四ケ所に設けている。

皿形部の葉状の飾りと，沈刻線内と篦削部分には丹塗を施して文様効果を上げている。

胎土には粗粒が小量混ざっているが，器面は美しく研究され，色調は紅褐色を呈し，器台の底部付近の化粧塗りのはげ落ちた面には芯の黒い地が現われているところが見られる。

縄文時代後期と思われるが，器形がよく整い，文様も一定の法則にしたがって施文され，三角形の透かしも篦削りの技法が冴え，南福寺式に見られる半乾燥の土器を篦削して施文する方法も見られる。東北地方の台付皿形土器に比すべき優品である。

縄文時代に器台付皿形土器が現われるのは後期である。しかし中期の阿高式に属するもので角形の器台が，吹上町掘川貝塚から出土した例があって，中期までさかのぼる可能性も考えられる。

後期の器台付皿形土器を有する型式では出水式，市来式，草野式，指宿式があるが，最も顕著なのは市来式であり，市来式の場合は深鉢形土器にも器台のあるものが見られる。

器台付皿形土器を出土する遺跡では，出水貝塚（出水式），市来貝塚（市来式），草野貝塚（市来式・草野式），大渡遺跡（市来式），中名遺跡（草野式），若宮遺跡（市来式・西平式）などが挙げられるが完形品の出土は少なく，且つ小形土器が多い。文様は属する型式の特徴を示すものが多い。

本遺跡出土の器台付皿形土器についてみると，従来発見された土器に比べると，器形は略一致するが，大きさが最も大きい。

文様は皿形部分の葉状の飾り４個，器台の上半に三角形の透し４個，x字状の篦削り文様４個，下半に籠編状に組み合された帯状文様４個というように，すべて４つの単位で組みたてられている。

文様の特徴は三角形の透し，x字状文，籠編状の表現などである。文様の単位が４個から成るのは，市来式，西平式などにみられる波状口縁の土器に四個の山形隆起があるのと関連があるものと思われる。文様は東北地域の大洞式の影響があるように思われる。　（河口貞徳）

図版1

白寿遺跡出土台付皿形土器

白寿遺跡の巨石